

「地続き」の思想 木村敏、中井久夫

Toward a Geology of Mind: Reading Bin Kinuma and Hisao Nakai

柳澤田実

Tami Yanagisawa

哲学者は、病気を取り扱うように、問いをとりあつかう。

ルードヴィッヒ・ハイネンシュタイン『哲学探求』

「……」だからこそ、内在平面は、一種の手探り状態の実験を折り込んでいるのであり、内在平面の描出は、ほとんどおおつぷらにできない手段、ほとんど適切でなく合理的でない手段に依拠しているのである。それは、夢、病的なプロセス、秘教的な経験、酩酊あるいは過度といったレベルに属する手段である。

ジルドゥル・ヌナフリックスガタリ『哲学とは何か』

そのとき、「心」という密室の中で、自分の魂にたいしてはげしくひきおこされた「内なる家」の大乱闘のために、顔つきも精神も動乱した私は、アリピウスにとびかかつてこっさげびました(傍点筆者)。

『告白』第八卷第八章第二九節

(山田晶訳、世界の名著16、中央公論社、一九七八)二七五頁

アウグスティヌスは、空間化された「心」のイメージを西欧の精神史に根付かせたという意味でも、極めて重要な思想家である。こうした心のイメージの系譜を辿る作業はそれ自体大いに魅力的に思われるのだが、今回試みるのはそれではない。本稿が主題とするのは、「心」や「魂」や「自己」と名付けられたこの極めて捉えがたいものを、「空間」として捉えることについてである。事実私たちは、アウグスティヌスの『告白』や西欧の庭園史を知らずとも、日常的に、心を、庭や部屋のような取り囲まれた空間として、あるいは、少なくとも「外」と区画された「内」側の空間とし

0

メランコリーが人間の創造的気質として捉えられていた頃、庭園は、しばしば人が存分に憂鬱になるための場所としてしつらえられていたらしい。こうした発想の背後には、人間の魂や心を、庭園や部屋のような、限定された空間との類比において捉えるという伝統がある。たとえば一六世紀のスペインの聖人アビラのテレジアは、人間の魂の訓育を、作庭に譬えているし、五世紀のアウグスティヌスの『告白』でも、庭園は、魂における最大のドラマである回心(conversio)の舞台として登場する。また、アウグスティヌスは魂(animus)や心(cor)を部屋や家にも譬えている。

て捉える習慣をもっている。こうした「心」理解の問題と可能性とは何か、心の病に取り組み思想家たちを介して、考えてみたいと思う。

空間化された心のイメージの問題は、心身問題とも密接な関わりをもっている。心を「内」側の空間として捉えるということは、心を身体の内側にある局所的な中枢として捉えることを意味している。心にとって身体は外部であり、この外部からの刺激が、中枢である心に入力され、心の働きが再び外部へと出力されるというモデルこそ、デカルト以来、中心的な心身理解になったのだ。

最後に、『理性的精神』がこの機械の中にあるとすると、それは脳の中に主要な座を占めるだろうが、それはちょうど、噴水技師が、噴水の運動を何らかのしかたで助勢したり、逆に妨げたり、あるいは変えたりしようと思うときは、機械の管がすべて集まっている監視装置の中にいなければならないのと同じ理由である。

「人間論」『デカルト著作集』第四卷